

金子は愚痴を言う人ではなく、他人の人格を云々することもない。ただ、遺稿にも見られるように、不労所得の上にあぐらをかき支配勢力に対する反感は消えなかった。ある意味では、彼は一生を勤労者として終わらせたとも言える。

勤労所得税は最大の悪税と攻撃、財産税の増徴を唱えた。大正年間すでにローマ字論を提唱しており、また、中国の革命軍に援助をしたり、その意味では新時代の人でもあった。

ただ、金子の眼は、あまりにも外を向き過ぎていた。その新知識を社内近代化にふり向けるのが、やや、おそきに失したようだ。株式会社への切替えもおそく、増資もおそい。金子の前には事業の拡大だけがあり、それだけに他からの制肘をおそれる気持も強かつ

天下三分の計

大正七年十二月、ちょうどクリスマスころだった。潜水艦用ジーゼルエンジン研究のため、スイスのある会社へ向う途中のことである。まず太平洋を船で渡り、アメリカ大陸を横断し、大西洋をやっと乗越え、二ヶ月も要して無事ロンドンまでたどりついた僕は、とるものもとりにあらず、鈴木商店のロンドン支店に高畑支店長を訪ねた。

高畑君は僕の顔を見るなり「金子さんはお達者ですか」といいながら、金庫の中から一通の封筒をとり出してみせた。それは金子さんが高畑支店長にあてて書かれた手紙である。開いてみると二年前の大正五年、戦争景気で忙しくなったロンドン支店を強化するため、神戸高商を出て間のない小川実三郎君を派遣することに決り、小川

ためだ。後継者と目した名支配人西川の急死により、より若い世代との年代的な断絶も生じる。業務の権限こそ大幅に移譲しておいたものの、組織は未確立――。

破綻後の金子は、お家再興をめざして、黙々と歩み続ける。そして、彼の最後の事業は、樺太のツンドラの資源化であった。不毛の地に新産業を起す――その夢は、ひとり老残孤影をひく身になって、変らない。彼の絶筆もまたツンドラに関するものであった。

事業から事業へ――。創業者的企業者として、人間能力の限界を行く理想像を、金子はわたしたちの前に残した。それは日本資本主義発展をとく一つの鍵であると同時に、今日にも通用する多くの教訓を提供してくれる。

浅田長平

(遺稿)

君はシベリア経由、ヨーロッパに向うことになった。神戸を旅立つ朝、小川君があいさつのため須磨の金子さんの自宅に何うと、筆を取ってさらさらと巻紙にしたためて「これを高畑支店長に渡してくれ」とじきじき手渡されたものであるという。

手紙は一丈余りもあつたであろうか、ともかく長文で、しかも名文、達筆の跡も鮮かに見事なものである。はじめの辺りは支店長に対して出された社命で、いわば公用文なのだが、僕は最後のところに非常な感銘を受けた。そのくだりはいまでも僕の脳裏に焼きついている。

「ドイツのカイゼルは今、英仏露はじめ世界の列強を向うに回し、独りよく戦っている。おそらく世界中で一番忙しい男であろう。と

ころが、私はそのカイゼルよりもさらに忙しい毎日を送っている。今の鈴木は「神戸の鈴木」だが私はこの戦争という絶好のチャンスをつかんで、日本一の事業会社に育て上げ、さらに「世界の鈴木」にのし上げたいのだ。もしそれが出来ないまでも三井、三菱と天下を三分し、その一つを取ってみたい。この夢を追う私はものすごく忙しい。君たちもそのつもりでしっかりやってくれ……」

金子さんはきくと三国志の故事を頭に浮かべながら、筆を走らせたに違いない。仕事一本に打込んだ男の熱情が長い巻紙の隅から隅までピンと行き渡り、金子さんの異常なまでに激しい意気込みは読む者に強烈な印象を与えずには置かなかつた。金子さんとはこんな人だったのである。

商機の生神様

金子直吉

元合同油脂社長 長崎 英造

語る人・元国際汽船取締役・東京都副知事 住田 正一

天下の生き字引

大正四、五年のことであつたが、澁沢（栄一）さんが神戸に來られて、それを迎えた宴席上で、山下龜三郎さんが、金子翁を紹介して言ったものだ。

「この金子は、何から何まで知らぬことはない、天下の生き字引です。金子の知らぬことといえは数々ある商品のうち、まア、棺桶についてのことぐらいのもんでしょ。」

ところが、それまで黙ってかたわらに聞いていた金子さんは、この時、むっくり顔をあげて、ウンニヤ、と大きく首を振った。

当時の鈴木商店は神戸製鋼所はもちろん、帝人、豊年製油、桜ビール、大里製糖などざつと六十近い企業を抱え、一方では貿易において当時の金で、三井物産の十五億について、鈴木商店が年額十三億に達する巨額を手がけていた。三菱商事は五億円にも足らなかつたと思う。この膨大な仕事を金子さんは一人できり回し、号令を出していたのである。まさに偉大というほかにいいようがない。ともかくえらい人だつた。

破れ帽子を頭に、全く風采をかまわぬ仕事一本に生きた金子さん。こんな立派な人が神戸にいたことを忘れてはならない。私も金子さんの感化を受けた一人である。

(元神戸商工会議所会頭、元株式会社神戸製鋼所相談役)

「それは大いにちがう。」

「いや、御けんそんを……」

「ちがうちがう、その棺桶のことなら、他のものより一層よく知っているんだよ。実は台湾の方の店で、その棺桶までこしらえて賣らせていたんだが、台湾人の上層、中層を顧客とする棺桶は、重要商品の一つでね……」

と、山下さんからこれだけは知るまいと持ち出された棺桶について、棺桶屋ハダシのうんちくを傾け出して、満座の人々をあつけないとらせ、果ては大笑いとなつてしまった。